

清流

（楽曲『Dear』、イラスト『私のせいで君は死ぬ 私の生に君は先立つ』翻案

×××とは知り合ってもう20年近くになる。

×××は小、中学校の同級生で、そのうち何度かはクラスメイトだった。

チョークと黒板が奏でるリズム、その隙間から唱えられる先生の念仏。選択肢や結末の少ないアクティブラーニングとかいうRPG。感情に任せて吐かれる誰も幸せにならない叱責。そんな整えられたコンテンツを自分たちは同じ時、同じ空間で体験していた。

その頃、×××と何か特別めいた間柄はなかったと思う。特に自分と彼女の尺度では。でも、最近になって卒業アルバムを見返してみると、寄せ書き欄のページ目、その左上には丸っこい文字のメッセージが×××の名前とともに書かれていた。

高校に進み、彼女は「SNSの中でたまに様子をみかける他校の人」になった。他の友人、その友人なんかの投稿に混ざって彼女のそれが流れてきたようだが、当時よっぽどそれが彼女のものだと思っていて見たことはなかった。誰が何をしているかなんて気にしているほど暇はなかった。

やがて、自分はおそらく唯一の選択肢だった、「地元で働いて生活を営む」という選択をした。ところが、地方都市に生まれ一人前の年齢になっても地元に残る、という人間はそう多くないらしい。20代になれば大抵、それまでいた住処よりも少し規模が大きく、少し距離の離れたような、そんな「街」での生活に憧れ、そこに働き口を求めるものらしい。そんな欲がどうやら同世代にとって適当らしいことを、自分は周りを見て知ることになった。

自分たちはなぜか、気づいたときにはある石の上にいた。この石は、渓流の中にある浮島としてのそれで、どこからともなく古めかしさとなにとない頼りがいのなさを漂わせている。ここから周りを見渡してみると、少し離れた上流の方に、その頭をより突き出して、しっかり丈夫そうにしている大きな石がとりあえず確認できる。初めのうちは、みんなですうやうやって石の上から周りを観察していたが、やがて、自分たちを包み込んでいる渓流が、不思議で残念ながら、緩やかに、しかし体感を持って、その水流を強めていることを知る。もし、この石の上にずっといれば、いつか、この急流に飲まれてしまうのではないか。そんな不安と焦りがきつと仲間たちを襲っていった。襲われた仲間の数はきつと時間とともに増えていった。そうして悩み、悩んだその結論として、大抵は川に飛び込んで、なんとか泳いで、安寧を与えてくれるであろう大石に乗り移ろうとしたのだ。自分はいって、そんな

泳ぐ力はなかった。身につけるチャンスはなかった。それに、いかんせん怖かった。だから、そんなことはしなかった。そんな自分を客観視できていた。その点、自分は冷静だった。そして何より、自分はこの石の上で満足していたのだ。

就職して五年。彼女からメッセージが届いたのは、ロックバンド、フィロソフィーのライブに参加した日だった。ライブ会場から一、二時間運転して帰宅し、寝支度をした後、ベッドで通知を開くとあまり見慣れないユーザー名から投稿に対してコメントがあった。

「フィロソフィー、好きなの！ わたしもライブ見に行った！」

アイコンから投稿を開き、このコメントが××からのものであることを認識した。

「久しぶり ファン歴6年でやっと行けたんだよね 最高だった」

すぐに既読がつく。返信が返ってくる。返信を送り返す。

長らく味わっていなかった熱い感情を覚えた。念願の彼らのライブに行けた夜に、ずっと周りにいなかった、彼らを愛する同志に出会えたことは昂っていた高揚感をより一層高めることになった。

結局、この日のやり取りは夜遅くになっても尽きることはなかった。

日を過ぎながらチャットで話していく中で、彼女もどうやら地元に残っているらしいことを知った。あまりいい地元残り勢。意気投合し、後日ご飯に行く約束をした。そうこうして二年半、自分たちは今、同棲して二ヶ月になるに至っている。

「やっと暖かくなってきて、なんだか嬉しいねえ」

日中の暖房を焚かなくても過ごせるようになってきた日曜の昼下がり。マーマレードの塗られたトーストを食べ、にやける彼女はたぶんそんなことを言った。家中に香る、トースターからの焼けたパンの匂い。互いの手にそれぞれ持っているトースト。表面はきつね色の見た目通り、ほどよくカリッとしている。にもかかわらず、歯応えのある薄い層を噛み切った先には、パン本来のふわつとした柔らかい食感が、やはりちよいどいいバランスで残っている。もうトースターを買い替えてから、何度か食べているはずなのに、口に入れる、その一口目のたびに意表を突かれる。そんないつでも新鮮な個人的な衝撃は、窓から入る温かい日差しと、多くの言葉が交わされていない、ゆつたりと流れる時間の中に溶け、静かなる感嘆へとその知覚を変えていく。最近買ったこのトースター。自分からすれば少し高級なものだった。「これじゃないとインテリアに合わない！」と彼女は頑なに譲らず、家電量販店で
かなたの
のしばらくの睨みあいの末、根負けし購入するに至った。でも今は、この家を包む穏やかな

雰囲気に絆され、なんだかんだいい買い物だったな、と高かった値段も許せるような気がしている。

朝からそれとなく点けていたテレビは5分間の天気予報コーナーになり、今日の予想最高気温15℃を伝えてる。

「ね？そう思わない？」

「ん？あーそうね」

均衡が崩れる。同意を求めてくる彼女に一つ返事を返す。その返ってきた言葉の少なさと言うことは言いきった、という自分の態度に一瞬戸惑うような、呆れるような、そんな表情を彼女はしている。でも、天気の話題でそれ以上何を言うことがあるだろうか。

数秒の静寂。

その間に、天気予報は明日の予報から週間予報に移り変わり、その後景には天狗高原に広がるのならか草原と雄大な風車が映っている。

「ねえねえ、最後に旅行行ったのっていつだったっけ？」

「んー、いつだったかね。しばらく行つてないかあ」

生返事で言葉を返す。

「あのさ、ゴールデンウィーク！どこか行こーよお」

年中間わず元気だなあ、と彼女に感心する。ゴールデンウィークはまだ先だし、休み、とれるよなあ、なんて先のことを考えると、先日内々に告げられた課長への昇進の件が頭をよぎる。

「金沢なんてどうかな？金沢って確か、蟹、有名だったよね？なんか美味しい蟹食べたいなあ」

彼女が続ける話に頭を切り替えようとする。が、感情が追いつかない。こっちはこれから大変なのに、ずいぶんと呑気なもんだと心の中で毒つくと同時に、そんな負の感情に結びついて、同棲してから気になるようになった彼女のだらしのなさが思い起こされる。

「五月だったら蟹の季節じゃないでしょ」

ふと思つた正論が口をついてしまう。すかさず大きく吸って吐かれる彼女の鼻息が聞こえてくる。その音を聞いて、また返事を誤ってしまった、と自分を責める。

「ねえ、〇〇〇ってなんでそんな言い方しかできないの？」

いつものパターンだ。詰^なられる。そう思い、自分はまた物置に逃げ込もうとする。

「え、いや、ちよつと待つてよー！」

珍しく彼女は逃げようとする自分を止めようと、後ろを向いた自分の肩に手をかける。

自分はその手を振り払う。
すかさず物置の戸を開める。
鍵をかける。

「ねえ…」

ドア越しに彼女の弱い声が聞こえてくる。

いつもと様子が違う。

普段の怒声じゃない。

思わず動揺する。

が、どうすればいいのか分からずそのまま部屋に閉じこもる。

黙って、うずくまる。

少しして、ドアを二発殴る音が聞こえてきた。そうして、音沙汰はなくなった。

無音の、モノで溢れた部屋。

だんだん見慣れてきつつある、この光景、この感情。

でも、今日は聞き慣れない彼女の声が聞こえた。

眼前の光景や感情に馴染む前に、ひよつとしたら×××との日々は…。

黒いものが頭をよぎる。

崩壊を予期してしまった。

そんな未来に不快感を覚えた。

そんなことを想像してしまった自分に不快感を覚えた。

最近頻繁に起こるコミュニケーションの不和はやるせなかった。

だが、それ以上に、思い起こされてしまった、現状維持された未来に待つ遠くない未来は自分の頭を絞めつけ、耐え難い苦痛を与えた。苦痛はすかさず脳内で渦を巻き、育ち、瞬く間に自分の思慮を埋め尽くした。一人しかない物置で、自分はただ、嵐が過ぎ去るのを待つように、しばらく思考することを止めざるを得なかった。

∴

彼女の存在が自分の中で思ったより大きくなっている。この二年半、彼女との時間がいつの間にか、自分から切り離せない「大切」になっていた。驚くほど。でも、そんな風に彼女

のことを思っているはずなのに彼女のことは未だによく分からない。分かっている。だから、自分は他人事のように彼女に接している節がある。元々、一緒にいて心地よかったから今も一緒にいるはずなのに。

それは単に地元に残っていたという同じ境遇だったからなのか。

共通の趣味があったからなのか。

二人ともご飯よりパン派だったからなのか。

そうやって、出会う前から、元から、似ていたということだけが理由だったのだろうか。

いや、そうじゃない。

そもそも、彼女と自分は全く違う性格だったはずだ。

：

高校生の頃。彼女との唯一の接点は、向こう側から一方的に、無差別に流れてくるSNSの投稿だった。連日のバイト終わり、束の間アプリを開くたびに新規投稿欄に彼女のそれがあつた。（このことはフィロソフイーライブの一件があつてアカウントをしつかり認識してからから気づいた。）風仁。彼女の投稿の大部分は、男性アイドルグループ風仁に関する投稿だった。疑いなく国民的アイドルだった彼らを、その頃テレビで見かけない日はなかった。熱心なファンだった彼女は当時、レギュラー番組を全て欠かさずチェックしていたという。まあ、熱心な人がいるなあ、とは思っていたが、フィロソフイーを好きになって、自分の好きな芸能人だったりコンテンツの面白さを人に知らせたくなるような、そんな心理もなるとなると分かるようになった。

：

中学生のとき、家庭が不安定になり、自分は自立を意識するようになった。勉強は少しかけていたから、高校の学費を抑えられるようにと、特待生を目指して内申点を意識するようになった。それでとりあえず手頃な学級副委員長になった。その学期の書記は彼女だった。彼女はとにかくイベントを楽しみにしていて、クラス会議では、いつも誰よりも発言をしていた。たまに提案や説明が突飛になりすぎたときには、『ドードー』とあたかも手綱で馬を

なだめるかのように委員長がブレーキをかけていた。その姿に、クラスはいつも微笑んでいた。

：

小学生でクラスが同じだったのは確か三、四年生の時だ。彼女は近所に住んでいて、そんな縁で家族ぐるみで一緒に河原へキャンプに行ったことがある。天真爛漫な彼女は清流のその水の冷たさにも驚いてはしゃいでいたが、彼女についてもっと鮮明に、自分の記憶に焼きついているのは、

「サワガニ。」

サワガニを熱心に、一緒に探していた。彼女の弾ける笑顔じゃなく、こっちの方が印象深かったのは当時自分が水に苦手意識を持っていたからだろう。河原に着いて、彼女は真つ先に水に入って、初めのうちは執拗に水に入るよう誘われた。それはとても嫌だった。でも、そんな自分に気づいて、彼女は川での遊び方を変えてくれたように今なら思える。

サワガニ。

彼女と付いて離れて、暗くなるまで探し回った、

サワガニ。

水は嫌だったけど、流される心配もなく、それに目的があればなんとか川に近づいて手を突っ込むことができた。

サワガニ。

何匹獲れるか競い合って、泥まみれになって、結局お互い4匹ずつしか獲れなかった、

サワガニ。

途中でハサミに指を挟まれて、見かけ以上の鋭さに涙目になりながら、それでも笑おうとする。そして指を挟んだ、

サワガニ。

家族のもとに持って帰って、下処理をされて、少量の油で揚げられた

サワガニ。

食べられた、

サワガニ。

それは自分が初めて食べた「カニ」だった。あまり覚えてないけど、どちらかといえば美味しかったと思う。

サワガニを食べているとき、彼女はずっと複雑そうな顔をしていた。でも、なんとなく、そんな彼女を見ていたら、彼女はそれに気づいて、自分の方を数秒見つめて、そして、霧が

晴れたような笑顔を僕に見せた。

ああ。だから、カニだったのかな。

さつき誘ってくれたのは。

そうなのかもしれない。

なら、僕は。

まずは僕自身が喜ぶようにすることがせめてもの向き合い方なんじゃないだろうか。彼女の根本がそれなら、僕もそういう風に振る舞ってもいいのかもしれない。

なんとなく、ストンと、整理がついた気がして。僕は物置の鍵を開ける。

「さつきは、その、悪かったと思う。ぶっきらぼうに××の気持ち無視するような言い方して。」

正座で向かい合い、改めて口火を切る。次に何を話すのか、彼女は同ようにじっと自分を見つめる。

「××つてさ、自分からすると眩しくて。温かくて。いつも温められていて。それでときどき、ぼーっと温まりすぎて。気づいたら熱いなって思ったりして。なんでそんなに熱いんだよ、って離れたくなって。でも、そうじゃなくてさ。なんだか、自分が太陽に温められている地球みたいになつてるけど、別にそうじゃなくって。」

ただどしくなつてでも、一つずつ言葉で思いを紡ぐ。とにかくそこに意識を向ける。自分が自分で決めてしまっている性格、他人への干涉制限、「影響の球壁」とでもいうか、オーラというか、そういうものを小さくしないように気を張る。きつと、彼女は聞き入れてくれる。

「きつと、僕の方も、もう少し温かさを持てるはずだってなんとも思つて。そういう生き方をこれまでサボつてきてしまつていて。温かさって、たぶん素直に生きることから生まれるのかなって思つて。自分はずつと、あなたとの差みたいなものに怯えてきたけど、その必要はないのかなって。自分なんかがつて、線引きしてるつもりで、でもそれは傲慢で。正しいと思つたことだけを言うこととか、余計なことを言わないこととか、傷つけないようにすることが優しさだとか思つてたけど、そういうわけではきつとないのかなって思つてさ。だから。無理矢理、気を遣わせてしまつてごめん。これからさき、お互いに、気を遣わないように、んー、えつと、気をつ：け、よ？」

なんだかややこしい言い方になつてしまつて、思わず口角と目線が上と下に、チグハグに

動いてしまう。喋り方の癖はなかなか抜けないな、と思いながら、彼女の方を見上げてみる。どうやら彼女も自分に釣られたようで、さっきまでの真剣な表情はどこかへ飛んでいつてしまっていた。そんな彼女の笑う顔を見て自分の笑いも込み上げてくる。そんな笑う自分を見て彼女の笑いもさらに増す。どんどんおかしい状況になっていく。笑いが止まらなくなる。でも、二人ともそれを止めようとは全く思わない。お互いがお互いの思うままに笑い、笑った…。

爆笑は一段落していき、彼女は目に涙を浮かべながら口を開く。

「なんか最近さ、心を開いてくれてないなって気になっちゃって。」

彼女も言葉を探す。

「なんか、多分ちよつと焦っちゃった、かな？」

「そっだよね。」

確かに相槌をうつ。その間、彼女の涙の雫が徐々に大きくなる。

「追い詰め、で、ごめんねえ！」

ついに我慢できなくなり、彼女は咽び、泣く。そんな彼女の背中をさすり、抱きしめ、なだめる。少し、彼女から離れ、近くのティッシュ箱を差し出す。彼女はティッシュに鼻をかむ。涙を拭き取る。拭き取られたティッシュを見て、今日、彼女は一日中家にいたにもかかわらず薄めのメイクをしていたことに気づく。やはり自分が気づけていなかっただけだった。些細なことにも気にかけているつもりになっていただけだったし、分からないと言いながら、彼女のことを勝手に決めつけていた。自分の中にしばらくあった感情の不和は自分が勝手に作り出したものだったのだとその刹那、理解した。

「ごめん、俺も、ほんとに。」

鼻をすすりながら、そんな言葉とともに自分の涙も溢れた。部屋の中に、誰かの涙を止める誰かがいなくなる。感情の乱高下。今度は、お互いが二人自身を思つて泣き、泣いた。

..

どれくらい時間が経つたのだろうか。お互いの情動が鼻をすするのみに収まつてきた。

「あのさ、ゴールデンウィークの話なんだけど、」

彼女は少し疲れた顔をして、こちらに視線を向ける。自分は続ける。

「サワガニを取りに行く、なんてどうかな…？」

彼女は少し考える。

「うーん、疲れるからやだ！」

笑顔を作ろうとしながら、声のテンションをなんとか上げて満身創痍の彼女はそう言った。素直な返答に、なんだかホツとしてしまい、力が抜け、思わず天井を仰いだ。

その日はその後、今回残念ながら馬の合わなかったサワガニをきつかけに昔の話をした。(彼女はどうかやらサワガニのことはあまり覚えていなかったらしい。) キャンプに行った頃、担任だった「大丈夫、大丈夫っ!」が口癖だった先生のこと。彼女が実家の引越しに合わせて、高校受験の志望校を選んだこと。対して自分の方は当時予感した通り、両親が離婚して、その後、**母はヒステリックをますます拗らせ**、せつなくなった特待生も維持できなくなったから高校はバイト潰けだったこと。彼女が受付の仕事をしている役場に、何度も何度も同じ書類の手続きをしようと来るお婆さんがいること。付き合つてすぐにフィロソフィーがドラマの主題歌を担当し始めたけど、その頃からバンドの方向性が変わってしまった、二人とも興醒めしてしまったこと。あのときの委員長が有名大学に進学して、カエルの生態を調べてるらしいこと。もう解散してしまったけど、メンバーは各々活躍している風仁のこと。前にも話したことあるような、何も生まない話を再び、誰も外を出歩かなくなる時間まで続けた。

そして、その夜は数週間ぶりに抱き合った。

夜はあつという間に明け、朝になる。眠いね、と言いいいながら、二人ともベッドから働きに出る。

時は進んでいく。

川は流れていく。

これからも、自分たちがこのまま、ともに暮らしていくのかは分からない。

でも、これまで逆らえないと思っていたあの溪流の流れに、まったく諦めることをしなくてもいいのかもしれない、と今は思える。自分もこの石から飛び込んでみたい、いつの間にか押さえ込んでいたそんな欲望を持つことを、多くの人が持つ感覚が自分の中にも多少はあることを認めてもいいんじゃないかって。

だから、まずは一つ。

澄んだ清流に、足の指先からそっと触れる。

それは、僕が思うより冷たさが鋭く深く刺してきて、だけど、それが僕の輪郭を作り出していくのがなんだか心地よかった。

作品名 清流

著者 イツクン
idkn

発行日 令和7年12月27日 <https://idkn.com/>にて公開

本書の無断転載、複製、二次配布を禁じます。

© 2025 idkn